

平成滑稽（三）

有富洋二

新しい歴史の幕開けは、悲しみに暮れた平成の代替わりの時とは違い、日本中がいま祝賀ムードに溢れている。「大化」より数えて二四八番目、一三〇〇年以上ある日本の元号の歴史の中で、国書を典拠とする初めての元号「令和」。『万葉集』から採られたこの元号は、いずれも平明な漢字が使われている。わざわざ難しい漢字を使う必要はないとの明確な意思も伺える。

句会や書物の中に、時折、言葉の難しい俳句を見かけるが、少々、疑問に思うことがある。本当にその言葉の選択が必要なのか。滑稽俳句では、その性質上、いたずらに難解な知識をひけらかしたりせず、平明な言葉が使われる。日常生活の中でよく使われる言葉を進んで取り入れ、必然性の無い言葉や無理な言葉を除き、よりの確な言葉を使うための吟味、努力がされている。

子規は、『俳諧大要』で「俳句に入る人織巧より…おのおの道を選びて進むこと勿論なれども、平易より進む方最も普通にしてしかも正路なり…」と言っている。芭蕉の言葉に「高悟帰俗」があるが、この高く悟って俗に帰れということとも、つながるように思う。言葉は、小難しく述べるより平易、平明である方が意図をくみ取りやすく、更にそれらを滑稽の心で伝えるという「遊び」のある方が高度な俳句なのである。「高悟帰俗」の解釈の一つとして、こういう理解もできるのではなかろうか。

芭蕉は、晩年、「さび・しをり・細み」を超えて「軽み」をもつぱら説いた。翁にしてなお浸かってきた伝統からいったん解き放れることを望み、結果として軽く生きること、芭蕉的エスプリを効かせて心の自由を掴み返すことを願ったのである。その最晩年の「軽み」こそ、俳句の本質である「滑稽」ではなかったか。

滑稽俳句のもう一つの性質としては、類句類想句の問題から遠いところにあ

るということである。その理由の一つとして、必ずしも季語中心、季語賛美ではなく、人間が描かれているからである。人間関係や人生の問題まで踏み込めば、詠む人それぞれの生き方、来し方が、自ずと個性的に現れる。そして、その独創性こそが滑稽俳句の血である。

古来より作曲家たちは、ドレミファのたった七つの音階から人々の心を揺さぶる無数の音楽を奏でてきた。数えきれないほどたくさんのおいしい言葉を持ち合わせている滑稽俳人なら、思わず口ずさみたくなるような新しい作品を携えて、きっと新しい時代へも踏み出していけるはずである。

およそ切れ味よく、いまだ触れたことのない、心から共感し合える、そんな滑稽俳句に巡り会ったときの喜びは深い。平成滑稽をけん引した八木健会長率いる滑稽俳句協会も早や十一年目、日々の暮らしの中で滑稽俳句という錦旗があるからこそ、どんな時代を迎えても、どこか安堵の気持ちで十七音と真剣に遊ぶことができるような気がする。

亀鳴くを聞きたくて長生きをせり	桂 信子
天心にして脇見せり春の雁	永田耕衣
蓮根の穴も二日の午後三時	橋 閒石

(完)